



名大トピックス

No.109 平成14年6月30日発行 名古屋大学総務部企画広報室 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel(052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

名古屋大学マネジメント情報を公開

名古屋大学マネジメント情報

[日本語 | English]

更新情報

2002/5/30 「教育サービスの社会貢献(PDF)」掲載

2002/5/16 「キーワード別指標」修正

2002/5/13 「関連リンク」掲載

目 標

財務・資源指標

成果指標

学生・教職員

教育

研究

社会サービス

教育研究環境

その他

ベンチマーキング(他大学との比較)

経営改善指標

各種調査結果

教育サービスの社会貢献(PDF)

情報源の所在(学内のみ)

サポート情報

用語集

キーワード別指標

関連リンク

開発スタッフ

マネジメント情報のめざすもの

G(Goal)-R(Resource)-P(Performance)のGRPを、組織活動の思考と役割行動の枠組みとして提案します。目標Gはビジョンを実現する手段であり、財務・資源Rは共有された目標を達成する手段となる。成果指標Pは目標の実現度を表現する手段の一つとする。GRPの連鎖とその相乗効果を期待し、名古屋大学人のビジョンの実現に参加する。そんなGRPマネジメント情報を創ることが、われわれスタッフのこだわりです。

```

graph TD
    G[目標  
GOAL] --- R[財務・資源  
RESOURCE]
    G --- P[成果  
PERFORMANCE]
    R --- P
            
```

名古屋大学 評価情報分析室
eval@eda.provost.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学マネジメント情報のホームページ (<http://eda.provost.nagoya-u.ac.jp/mi/>)

CONTENTS

名古屋大学マネジメント情報の公開.....	2	博物館が第15回講演会を開催.....	11
名誉教授称号授与式・懇談会を開催.....	4	ウズベキスタン・タシケント法科大学で留学説明会を開催...	12
新名誉教授のことは.....	5	新任部局長等の紹介.....	12
太陽地球環境研究所で一般公開・講演会を実施.....	8	平成14年度名古屋大学公開講座(東山地区)・ラジオ放送	
先端技術共同研究センターが基礎特許セミナーを開催.....	9	公開講座の日程が決まる.....	13
(財)武田科学振興財団研究奨励金の贈呈が行われる.....	10	本学関係の新聞記事掲載一覧(14年5月分).....	18



名古屋大学マネジメント情報の公開

評価情報分析室長 池田 輝政
(総長補佐、高等教育研究センター教授)

このたび、評価情報分析室(2001年2月設置)では、「名古屋大学マネジメント情報」のホームページ(<http://www.eda.provost.nagoya-u.ac.jp/mi/>)を公開することになりました。このホームページは、本学の目標、財務・資源の指標、成果の指標、他大学との比較などのパートからできています。

これまで、本学では、大学に関する基本的な統計をパンフレットやホームページを通して公開してきましたが、今回公開された「名古屋大学マネジメント情報」は、従来のもとは大きく異なります。

従来の数値情報は、学生数や教職員数など、いわば大学の規模を語るために作成されてきましたが、そこでは、複雑で多様な大学の特徴や活動を数値情報で表現するとか、これまでに達成してきた実績を数値情報で説明する、という考え方が希薄でした。今回のマネジメント情報は、名古屋大学が描く将来のビジョンや多様な活動内容を数値情報に置き換えてみようというものです。ビジョンや目標という質的なものをデジタルな量で表現するという作業は難しい仕事ですが、国や国際社会の動向を踏まえると、大学が社会に対する説明責任を果たすために避けて通れない途になってきました。

「名古屋大学マネジメント情報」には、「学生の年齢別構成」、「学生/教官比率」、「中途退学率」、「リテンション率」、「留学生数」などの指標が並んでいますが、どのような基準で指標を決めたかといいますと、本学では、具体的な指標に直結するような目標を設定していないため、設置目的や組織体制が本学と類似した国

外の大学を調査し、そこで重視されている指標を参考にしました。

また、この「名古屋大学マネジメント情報」がより一層有意義なものとなるためには、コンテンツの充実が求められます。そのためにも、不足しているデータを収集するとともに、学内のデータベースを直接利用するための自動生成プログラムを開発することが急がれています。一般にWEBページは情報を最新に保つのにとても手間がかかりますので、これをいかに省力化するかが問題です。本学の場合、多くのデータが既に電子化されているものもあれば、ペーパーのものもあり、いろいろなシステムに分散しているので自動化は大変な作業となります。昨年度、評価情報分析室では、イギリス、オーストラリアの大学を調査しましたが、このような業務をする室の専任スタッフが10人以上配置されており、評価情報分析室(現スタッフ兼務教官3名)のスタッフの強化が必要だと思えます。

「名古屋大学マネジメント情報」は、日本の大学のなかでは、本学がフロントランナーです。それだけに、評価情報分析室の開発スタッフには非常に大変な仕事ですが、逆に大変面白い仕事でもあります。このようなマネジメント情報の発信システムを創りあげるには時間と費用がかかり、しかも、学内の教職員の理解と協力も大変重要です。これが完成すれば、使い方によってさまざまな効果がうまれます。当分の間は、ホームページを公開しながら開発していきますので、応援をよろしくお願いします。

名古屋大学

成果指標(教育)

目 標 財務・資源 成 果

名古屋大学全体

学生・教職員

教育

入学者数(全体)
 志願者・受験者・合格者・
 入学者の性別構成比および競争倍率
 入学者数[留学生]
 志願者・受験者・合格者・
 入学者の性別構成比および競争倍率[留学生]
 入学者数[社会人]
 志願者・受験者・合格者・
 入学者の性別構成比および競争倍率[社会人]
 入学試験の平均合格得点
 学部入学生の出身都道府県
 学部入学生の出身地域別構成比
 在学留学生の出身国・地域
 在学留学生の出身国・地域別構成比
 編入者数(全体)
 志願者・受験者・合格者・
 入学者の性別構成比および競争倍率[編入者]
 留年者数
 留年者/全学生比率
 休学者数
 休学者/全学生比率
 中途退学者数
 中途退学者/全学生
 リテンション数
 リテンション数/全学生
 奨学金の申請・採用者数(除く留学生)
 奨学金採用者/申請者比率
 奨学金採用者/全学生比率
 奨学金の採用者数[留学生]
 授業料等の免除申請者・
 免除決定者数(除く留学生)
 授業料等の免除決定者/免除申請者比率(除く留学生)
 授業料等の免除決定者/全学生(除く留学生)
 授業料等の免除申請者・
 決定者数[留学生]
 授業料等の免除決定者/免除申請者比率[留学生]
 海外への留学生数
 インターンシップ派遣者数

入学者数(全体)

学部(除く留学生)	1999年			2000年			2001年		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
入学定員			2,245			2,165			2,135
志願者数	6,020	2,438	8,458	6,595	2,559	9,154	6,119	2,446	8,565
受験者数	4,772	1,958	6,730	5,370	2,065	7,435	4,999	2,013	7,012
合格者数	1,690	759	2,449	1,667	697	2,364	1,661	678	2,334
入学者数	1,593	725	2,318	1,559	668	2,227	1,539	642	2,181

大学院(前期課程) (含む留学生)	1999年			2000年			2001年		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
入学定員			1,235			1,297			1,358
志願者数			2,688	2,307	710	3,017	2,267	738	3,005
受験者数									
合格者数									
入学者数	1,221	319	1,540	1,259	339	1,598	1,282	372	1,654

大学院(後期課程) (含む留学生)	1999年			2000年			2001年		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
入学定員			684			757			768
志願者数			727	541	260	801	518	254	772
受験者数									
合格者数									
入学者数	420	183	603	445	190	635	408	181	589

▲TOP

志願者・受験者・合格者・入学者の性別構成比および競争倍率

学部(除く留学生)	1999年			2000年			2001年		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
志願者数/入学定員	2.68	1.09	3.77	3.05	1.18	4.23	2.87	1.15	4.01
受験者数/入学定員	2.13	0.87	3.00	2.48	0.95	3.43	2.34	0.94	3.28
合格者数/入学定員	0.75	0.34	1.09	0.77	0.32	1.09	0.78	0.32	1.09
合格者数/受験者数	0.35	0.39	0.36	0.31	0.34	0.32	0.33	0.34	0.33
入学者数/入学定員	0.71	0.32	1.03	0.72	0.31	1.03	0.72	0.30	1.02
入学者数/合格者数	0.94	0.96	0.95	0.94	0.96	0.94	0.93	0.95	0.93

大学院(前期課程) (含む留学生)	1999年			2000年			2001年		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
志願者数/入学定員			2.18			2.33			2.21
受験者数/入学定員									



名誉教授称号授与式・懇談会を開催

名誉教授称号授与式が5月8日、豊田講堂第1会議室で行われました。

名誉教授の称号は、多年本学に勤務し、教育上又は学術上特に功績のあった教授に授与するもので、今回新たに28名（新制計769名）に授与されました。

称号授与式に引き続き、名誉教授懇談会が80名あまりの参加を得てシンポジオンホールで開催されました。懇談会は、新名誉教授の紹介で始まり、昨秋及び今春の叙勲褒章受章者、部局長等の紹介に続いて、松尾総長のあいさつの後、飯島元学長の発声で乾杯が行われ、始終和やかな雰囲気の中で歓談が行われました。

新名誉教授（敬称略）

文学研究科	渡邊 誠
教育発達科学研究科	新海 英行
経済学研究科	櫻井 克彦
理学研究科	北門 新作
理学研究科附属臨海実験所	林 博司
理学研究科	松浦 民房
医学研究科	大野 良之
医学研究科	早川 哲夫

医学研究科附属病態制御研究施設
 医学研究科
 医学研究科
 工学研究科
 生命農学研究科
 生命農学研究科
 生命農学研究科附属農場
 多元数理科学研究科
 国際言語文化研究科
 環境学研究科
 生物分子応答研究センター
 地球水循環研究センター
 言語文化部

吉田 松年
 渡邊 一功
 齋藤 英彦
 河上 省吾
 佐野 正道
 澤木 泰彦
 柘植 新
 八田 一郎
 藤原 俊隆
 山内 睦文
 藤田 秀臣
 今井 忠良
 奥村 純市
 吉田 重方
 青本 和彦
 武田 周一
 小川 克郎
 尾里建二郎
 加藤喜久雄
 熊澤 一衛

以上28名



新名誉教授のうち、定年退官された先生方（105で「定年退官教授のことば」を掲載）以外の3先生に寄稿いただきましたので、次ページより「新名誉教授のことば」として紹介します。

大学の思い出

齋藤英彦



昭和32年に名古屋大学に入学した。滝子にあった教養部では硬式庭球部に入ったが、コートは2面しかなく一年生はなかなか練習することが出来ないため、上級生のいない授業中にテニスをする事になり折角の講義や実習にあまり出席しなかった。大学に入った意義と価値を自覚せず自分が如何に未熟であったか今にして思うと汗顔の至りであり、もったいないことをしたと思う。2年後から医学部のある鶴舞キャンパスに移ったが、自転車で東山に練習に通った。名古屋市東の端は東山動物園であり、山手通りが未だ舗装されていなくて雨になると泥だらけになった頃である。現在もある山の上のテニスコートは懐かしい場所である。医学教育も現在のように6年一貫でなかった時代で自由な時間も多かったと自分では思っている。なによりもよかったのは色々な学部友人が出来たことであり、総合大学に学んだ長所の1つである。それにつけても最近4年一貫や6年一貫教育となったのは大変残念なことと思う。専門分野の知識や技術の量が増加したために一般教養の教育がないがしろにされているような気がする。教養部を解体したのは間違いであったのではないか。

昭和38年に卒業し、大学院で内科学を専攻した後、昭和43年に米国に留学した。始めは2～3年で日本に帰るつもりであったが何となく米国に居付いてしまいBostonとClevelandの2つの大学に合計13年間勤務した。その後、帰国して佐賀医科大学に3年つとめ、昭和59年に16年振りに名古屋へ帰った。それ以来17年間名古屋大学にお世話になった。一緒に仕事をする多くの優秀な人達に恵まれたことを心から感謝している。長いような短いような気がするが、いつも若い人々に接する仕事は楽しかった。同じ医学部の学生でも年が違

うせいか日本と米国では随分違いがある。米国では4年制の大学を卒業後に医学部へ入り、自分が経済的に自立している。日本では殆どが親がかりである。米国の学生はそれだけ成熟度も高く、真剣に勉強に励み休講を喜ぶものはいないが、日本の学生は遊び気分が抜けない所がある。しかし、優秀さの点では日本の学生は米国の学生に全くひけをとらないように思う。今さら云っても現状を変えることは不可能であるが、医学部の教育、研究にとり東山地区の他学部から離れていることは大きなマイナスである。他分野の人々と交流して視野を大きく広げる機会が少なく、総合大学の利点を生かしきれていない。

一方、日々の仕事に追われてこの17年間に自分は何をしたのか振り返ると^{しくじ}忸怩たるものがある。研究については血液学を専攻し、多くの教室員とともに白血病、再生不良性貧血、悪性リンパ腫、出血性疾患、血栓症の成因、病態、診断、治療の研究に従事した。最近是我が国における臍帯血移植システムの確立に努力している。もっと時間を有効に使い努力をすれば少しはましな仕事が出来たのではないかと自分の才能を省みず思うこともある。しかし、なによりも健康で退官を迎えることが出来たことを有り難く思う。今後の名古屋大学の益々の発展を心から祈る。

三二同窓会

藤田 秀 臣



私は昨年9月30日に、定年まで1年半を残して退職しました。年度途中の退職であるため、いわゆる最終講義はしなくてよいものと思っておりましたが、所属専攻の先生方のご配慮と研究科長のお勧めによって、定年退官の教授と同様の最終講義の機会を与えていただきました。9月の後半は定期試験期間であり、また所属専攻の外部評価が9月18日に実施されたことなどもあって、最終講義は9月28日(金)の午後、文字どおり最終日の講義となりました。いざ講義を準備する段になってみると、最終講義は誰を対象に何を講義すべきなのだろうか、と考え込む始末でしたが、結局、これまで自分が歩んできた道を振り返りつつ、研究にまつわるエピソードなどを紹介させていただくことにしました。在職中は自分の足跡を振り返る機会などあまりなかっただけに、古い資料や写真を眺めているといろいろ新しい発見もあり、随分有意義な機会を与えていただいたと感謝するに至りました。

私は4年生の卒業研究から大学院博士課程まで6年間を古屋善正教授の御指導のもとで流体力学に関する研究に従事しましたが、博士課程満後は機械工学第二学科の自動車工学講座(牧 忠教授担当)の助手に採用していただきました。1年半後に機械学科の熱力学及び熱機関講座に移り、高浜平七郎教授のもとで伝熱工学の研究を始めましたが、3年半後には創設間もない三重大学工学部に助教授として赴任しました。三重大学では、後に名古屋大学の工学部長を務められた藤本哲夫教授御担当の熱工学講座で7年間お世話になりましたが、在職中の1年間は文部省在外研究員としてカリフォルニア大学デービス校で過ごしたから、文部教官就職後の12年間に4つの研究室を経験したことになります。

大学院を終えたところで専門分野が変わりましたが、新分野での研究が思うようには進捗しなかったこともあって

随分思い悩んだ時期もありました。しかし、若い時期に研究対象が異なるいくつかの研究室に籍をおいて、多くの立派な先生方の御指導を受けることができたことは、今では非常に貴重な財産になっていると感謝しております。

昭和54年4月に高浜教授の研究室に助教授として戻り、高浜教授御退官後の昭和59年1月から17年9ヶ月間、その講座を担当させていただきました。この間、講座の名称は改組によって2度変わっておりますが、一貫して強制対流熱伝達と気液二相流に関する研究を行ってきました。

昨年9月の最終講義にも多くの卒業生が出席してくれましたが、先日、名古屋大学で私が担当した研究室から巣立った卒業生諸君が、研究室の同窓会を開いてくれました。修士の修了者が中心でしたが、研究室を支えてくださった教職員や学位の取得などで研究室にゆかりのある方たちも多数参加くださいました。卒業生の修了年度は20年以上にわたっていましたが、アットホームな雰囲気非常に素晴らしい会でした。このような幅広い年代の卒業生が親しく歓談している情景を眺め、またその中に入って語り合うこともでき、これぞ教師冥利と大変うれしくまた感謝の気持ちでいっぱいになりました。

3月の初旬だったでしょうか、新聞紙上で名古屋大学にも全学の同窓会が間もなく設立されるとの記事を拝見しましたが、全学の同窓会も今回のような研究室単位やクラス単位の三二同窓会の存在が大切な役割を果たすものと思います。卒業生のパワーが、大学にもまた在学生にも新鮮な活力を与えてくれることを期待しております。

ブービー賞の名誉教授

熊澤 一 衛



辞書を引くと、booby はバカ、まぬけ、booby prize は最下位の人におどけて与えられる賞のこと。ところが、ボーリングやゴルフでは最後から2番目の人に与えられている。何故だかうれしいことは私にはわからないが、今回、図らずも名大の名誉教授の称号をいただいて、私はブービー賞をいただいたと考えている。

ひょっとすると名大も近く行政法人化されて、「国立大」としての名大の最後の、あるいは最後から2番目の名誉教授になるかも知れないというのが表面的な理由である。実際、5月8日の式典でも松尾総長から最後に称号をいただいた。そのあとの懇親会でも多くの先輩の先生方に最後に紹介された。

別にひがむ気持でこういうことを書いているのではない。ブービー賞をいただいたというぐらいの気持を持っていただけると、これからの人生を過ごすのに良いと思っている。また若い世代の人に、jeunesse にも、こういう姿勢でいた方が役に立てると心から考えるからである。

近景として、称号授与式と懇談会の様子がある。遠景としては、「あっという間」に過ぎてしまった31年間の国立大の生活がある。

松尾総長は法人化が議題に上ってから実に精力的に名大の運営にあたってこられた。「大学の現状と課題」や「最近の動き」の報告を聞かせてもらって、これ以上は誰れも立派に対応はできないと思ったものである。ところがその直後、総長の苦勞を多としつつも、飯島先生が「文部省の優等生にならず、学問の王道を歩んでほしい」と注文をつけられた。当日の私の収穫であり、身がひきしまった。高等研究院や教養教育院に大学を分けて「教養」の方には行きたくない風潮があるのを見るにつけ、「反対」の立場を決めていたので、

強い味方を得た感じがした。

飯島先生は昔、広大の学長でもあられた。今から31年前、はじめて職を得て広大のフランス語講師として赴任した頃のことである。大学紛争の名残りがまだあって教養部でいつもストライキが決行されていた。私は留学から帰り生きたフランス語の教育をするのは当然のこと、フランス文化の良さを伝え、日本文化にもプラスになるような研究教育をしようとはりきっていた。

しかし、しばらくすると教養部がいかに損か、総合的学問を目ざして学部化しようという議論に巻き込まれ、多くの時間を失うことになった。5年後には総合科学部が成立したが、外国語の教官は「共通」のまゝに据えおかれ独自の学生はつかなかった。こゝで見たものは、学問の「総合」などではおおよそなく、少しでもよい身分になろうとする人間のあさましい姿、姿であった。

式典の控え室で工学部の藤原俊隆教授と偶然会った。私が何をしに現れたのか理解できない様子であった。40年前、東京の練馬の下宿で一時期一緒に過したことがある先輩である。彼は空の彼方を見あげるロマンチストで立派な航空学者、私はシベリヤ経由で当時は行くしかなかった遠い彼方のフランスを学ぶ駄洒落学者、学生時代の思い出を語り合い、同じ日に称号を得て記念写真に並んでおさまった。そして、共に思ったことは一つ、「どうして日本はこう大学の改革ばかりやるのでしょうかね！」



太陽地球環境研究所で一般公開・講演会を実施

太陽地球環境研究所は、5月18日、一般公開と講演会を豊川キャンパスで実施しました。この一般公開と講演会は、豊川市を中心とした近隣の一般市民に研究所の研究活動の内容を広く理解してもらうことを目的として、豊川市と同市教育委員会の後援を得て平成3年度から毎年行っているもので、今回で11回目を迎え、毎回多くの市民が参加し、教職員にとって貴重な市民との触れ合いの場となっています。

公開当日は、悪天候にも関わらず、開始早々から多数の市民が訪れ、来所者は約550名に達し、駐車場が満車になるほどの大盛況となりました。今年度は近くの小学校・中学校からクラス単位で校外学習として児童・生徒が300名近く見学に訪れました。

一般公開では、小・中学生にも研究内容をわかってもらえるよう工夫を凝らしたパネルや各種の観測装置などが展示され、また見学者が自ら参加して行う実演の企画が多数行われ、それらを通じて研究活動が紹介

されました。「雲を作る実験」、「北海道で見たオーロラ」、「太陽系への旅、オーロラシアター」、「宇宙をシュミレートしてみよう」、「電気回路を作ってみよう」などの展示や実演が行われたほか、屋外では巨大な太陽アンテナの見学やペットボトルを使った「ロケット打ち上げへの挑戦」が行われました。

午後の講演会は、100名近く満席となった会議室において、徳丸 同研究所助教授による「太陽の「くしゃみ」」および西野 同研究所助教授による「南極と北極ではどう違うのか」と題した二つの講演が行われました。徳丸助教授は太陽が時々吹き出す猛スピードのガスが地球に与える影響について多くの画像を見せながらわかりやすく解説し、また、西野助教授は2つの地球の極での、冰山、オーロラ、生物そして人間生活の違いについて、美しいオーロラの映像を交えながら講演を行い、両講演とも終了後には聴衆者から多くの質問が寄せられました。



子供たちにもわかりやすく研究を説明



先端技術共同研究センターが基礎特許セミナー 「研究成果を特許にするための基礎知識」を開催

先端技術共同研究センターは、昨年8月から毎月、基礎特許セミナーを開催しており、5月10日に10回目を迎えました。

セミナーでは、「論文から上手に特許を出す方法」について、渡辺 同センター教授が講義し、「先行特許を調査する方法」について、加藤英昭氏（愛知県知的所有権センターの特許検索アドバイザー）または阿部量一氏（先端技術共同研究センターの科学技術コーディネーター）が講義を行い、渡邊香織氏がパソコン検索の操作法を指導しました。

これまでの受講者数は141名で、受講者の過半数を大学院生および助手で、部局別の受講者内訳は工学研究科57名、理学研究科32名、生命農学研究科12名、医学研究科7名、その他5名です。なお、愛知・岐阜・静岡県内の国立・公立・私立の9大学からも28名が受講しました。

同セミナーは、毎回定員を超えた申し込みを得て、若い研究者や学生に対する知的所有権啓蒙のよい機会となっており、今後も継続して開催される予定です。





(財)武田科学振興財団研究奨励金の贈呈が行われる

5月30日、財団法人武田科学振興財団の平成14年度研究奨励金が、総長応接室において内林政夫 同財団理事長から松尾総長へ贈呈されました。

この奨励金は、ライフサイエンスに関する基礎的研究への助成を目的とするもので、贈呈に際し、総長から奨励金を有効に活用するとともに、大学として研究等の発展に一層努力していきたいことなど謝辞が述べられました。

引き続き、採択された3名の研究者からそれぞれ研究概要の説明があり、なごやかに懇談がおこなわれました。

研究奨励金採択者及び研究題目は、次のとおりです。

鳥橋 茂子 大学院医学系研究助教授
(機能構築医学専攻)

研究題目 「消化管運動ペースメーカー細胞におけるリズム発生機構とカルシウム動態」

石原 一彰 大学院工学研究科助教授
(生物機能工学専攻)

研究題目 「ルイス酸複合型キラルプレステッド酸触媒を用いるバイオミメティックポリエン環化反応」

三宅 克英 難処理人工物研究センター助教授

研究題目 「幹細胞工学の応用のための染色体工学研究」



内林理事長によるあいさつ



博物館が第15回講演会を開催

博物館は5月10日、事務局施設推進室の木方 工学部社会環境工学科助手を講師に招き「名古屋帝国大学創設期のキャンパスプラン」をテーマに、第15回特別講演会を博物館講義室において開催し、約50名が参加しました。

木方助手は、映像資料を駆使して、渋澤初代総長らが描いた構想の概要を、現実のキャンパス整備の有様と対比させて、わかりやすく解説しました。

東山キャンパスは、戦前戦中期における最後の大規模キャンパスとして、当時先進的な名古屋市都市計画（八事丘陵地の区画整理）事業のなかで誕生しました。渋澤プラン（1940年）にはすでに、現在のグリーンベルトにつながる「中央街路」が構想されています。渋澤は、戦時下での物資不足の折から良質の建築は無

理と判断し、「緑の学園構想」として植樹を中心とした環境整備を進めました。グリーンベルトに現在繁っているクスとケヤキは、本多静六東京帝大教授の調査に基づく樹種提案によるものです。当初プランと現状とのこうした連続の一方、鏡ヶ池を中心とした水景のなかにサロンのな場をつくるという構想は戦災によって中断され放棄されており、この水景を重視することが今後の課題ではないかと木方助手から提案がありました。

その後、渋澤プランに当初から関わった山崎一雄 名誉教授の回想談や、市民の方々からのキャンパスの現況に対する質問や問題提起などが相つぎ、盛況のうちに閉会しました。



木方助手による講演



ウズベキスタン・タシケント法科大学で 留学説明会を開催

5月26日、ウズベキスタンのタシケント法科大学において、本学への留学説明会を実施しました。

これは、日本への留学希望者が多い同大学からの要望により、医学系研究科の途上国医療保険事情の調査団に同行した学務部留学生課の浅井 留学生企画掛長によって開催されたもので、本学から同大学へ出張中の市橋 法学研究科教授が通訳を行い、学生及び教職員50名以上が出席しました。

説明会では、本学の概要、日本の留学制度のあり方、奨学金や留学生の実態等が丁寧に説明され、その後の質疑応答では多くの質問が寄せられ、終了後にも廊下で質問責めになるなど、日本への留学熱の高さを物語っていました。



新任部局長等の紹介



法政国際教育協力研究センター長
杉浦 一孝

(すぎうら かずたか)

昭和23年11月30日生

平成14年6月1日発令

(略歴)

昭和53年4月

名古屋大学助手(法学部)

昭和54年4月

大阪経済法科大学講師(法学部)

昭和56年4月

大阪経済法科大学助教授(法学部)

平成3年4月

名古屋大学教授(法学部)

平成11年4月

名古屋大学教授(大学院法学研究科)

平成14年6月

法政国際教育協力研究センター長(～16.3.31)

INFORMATION

平成14年度名古屋大学公開講座（東山地区）・ ラジオ放送公開講座の日程が決まる

平成14年度に本学で開講される公開講座のテーマ及びプログラムが決定しましたので、お知らせします。
また、平成11年度から開講されているラジオ放送公開講座も、公開講座の中から10講座を選定して、7月7日から東海ラジオ放送で放送されます。

1. 名古屋大学公開講座（東山地区）

「空間を生きる」 - 生き物と環境の語らい -

20世紀は科学技術が飛躍的に進歩した時代でした。日本をはじめとする先進国では市民社会が成熟し、物質的に豊かな生活を生涯にわたって享受することができるようになりました。技術の発展と大衆化によって自動車、航空機などは人々の移動手段としてほぼ定着し、個人の活動する空間は実質的に地域はおろか国の枠組みをも越えて、地球全体を覆うまでに拡大しました。他方、科学の発展は人間が直接目にすることのできない空間 - 地球の深部、宇宙の果て、生命を織りなす細胞の内部、などの姿を次々に明らかにしてきました。さらには今世紀にまたがるここ数年の間に、計算機が創り出す仮想的な空間のなかでも人々は様々な活動をし始めています。

「人間は考える葦である」 - 17世紀にこの有名な格言を遺したパスカルは、同じ著書「パンセ」の中で述べています。「われわれの尊厳のすべては考えることの中にある。我々が立ち上がらなければならないのはそこからであって我々の満たすことのできない空間や時間からではない。だからよく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある。」 - 皮肉なことに、我々は、満たすことのできる空間を増大させた結果、そこに新たな問題を見だしつつあります。20世紀から引き継ぎ、今日ますます先鋭化しつつある様々な環境問題がその一つです。公害問題は地域を越えて地球規模の地球温暖化問題に、ゴミ問題はその量の問題とともに、ダイオキシンや環境ホルモンなどの、質の問題にも、それぞれ拡大しています。また、情報交換手段の発展にともなって、人間関係の問題も浮上しています。人々はこれら環境問題に関する情報を不安感をもって受け入れ、問題認識を共有し始めています。

つまり、人間中心の環境認識ではなく、環境とともにある人間認識が求められているともいえます。その意味で、「語らい」に意味があります。「語る」の語源は「かたろう」にあり、これは、「侵し合う」という意味だからです。主体としての人間が語った瞬間に、同時に環境としての相手と関係し合う。生き物と環境が、侵し合い、係わりあい、支え合うのです。人間の横暴をいさめる、こうした認識が、今、求められているといえます。

名古屋大学においてもまた、こうした精神を基礎に、問題の正確な認識と解決に向けての様々な思考を始めています。我々の手にした様々な空間はどのようなものか、その空間をどのように操り、そこで人はどのように生きるべきか。本講座では、このような観点のもと、「空間を生きる」を総合テーマに、様々な学問分野からの最新の研究・考察の成果を解説します。

応募方法

1. 募集定員 200名(先着順)
2. 応募資格 18才以上の方
3. 受講料 8,800円
4. 申込方法 原則として郵送に限らせていただきます。
受講希望の方は、現住所・氏名・電話番号を明記の上、
上記受講料を添えて現金書留にてお申し込みください。
なお、現金書留封筒の表面左下に「公開講座受講希望」と朱書願います。
5. 申込期間 平成14年7月1日(月)から8月16日(金)
6. 申込先 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学学務部入試課「公開講座」係
TEL (052) 789-2185・2186

開設時間 午後6時00分～7時30分

開設場所 名古屋大学シンポジオン

修了証 10回以上出席の方に修了証書を授与します。

その他 毎回15分程度を質疑応答の時間に予定しています。

問い合わせ先 その他、この講座に関する御質問及びお問い合わせにつきましては、前記申込先まで、電話又は郵便(返信用封筒に切手貼付)によりお願いいたします。

講座の日程・内容・担当講師

回	講義月日	講義題目	講義の内容	担当講師所属部局 及び講師氏名
1	8月22日(木)	物語の中の時間と空間	竹取物語から源氏物語にいたる平安朝の物語において、その空間の意識が、どのように時間と結びついているのかについて、「心的遠近法」という理論仮説の立場からお話します。物語の基本的な話型が、世界観や人生観と強く結びついていること、人間にとっての外部の表現と心の内部の表現とが連続的に語られることなどについて、日本語や日本文化の特性を一般化して論じます。	文学研究科 教授 高橋 亨 <small>たかはし とおる</small>
2	8月27日(火)	衰弱する学校空間	最先端の機器や教具を備え、行き届いた情報処理環境をもち、書画・彫塑など少くない文化財を受け継ぎ、豊かな物材に囲まれ、新しい建物・教室・施設を持つ学校が、安全面や健康・衛生への配慮を疑問視され、人間形成力を失っているとさえ指摘されるのはなぜでしょうか。一見豊かに見える教育環境に潜む非教育的な実態と、それを生み出す構造的な問題を取り上げ、今、学校(空間)はどうなっているのか考えてみようと思います。	教育発達科学研究科 教授 高木 靖文 <small>たかぎ やすふみ</small>
3	8月29日(木)	ミクロの生命空間 - 細胞を探検する -	地球上の全ての生き物は細胞から成り立っています。細胞はものすごく薄い膜に囲まれた、目にも見えないミクロの空間です。その内部にはタンパク質線維のネットワークがジャングルのように張り巡らされています。その上を走りまわるモーター蛋白質が、膜器官を変形し、分裂し、融合させています。これらの様子を映画「ミクロの決死圏」のように探検しようと思います。	理学研究科 教授 宝谷 紘一 <small>ほうたに ひろかず</small>

回	講義月日	講義題目	講義の内容	担当講師所属部局 及び講師氏名
4	9月3日(火)	ゲーム論で環境問題を考える	環境問題を経済学の分野で取り上げる場合、伝統的には外部性と言う考え方で扱ってきました。この考え方に沿った環境問題の1つの解決策としてよく知られているのは、ピグー税と言われる環境税を汚染発生者に課すことです。しかし、近年問題となっているのは、国境を超えた汚染問題であり、この場合には1国の政策のみでは限界がある。国家間での話し合い(交渉)という問題が発生します。国家間の交渉と言う側面に焦点をあてて、ゲーム論の手法により、越境的環境問題を考えていくことにします。	経済学研究科 教授 多和田 眞
5	9月5日(木)	右と左について - 空間の哲学への招待 -	「左右・上下・前後」、これらは3次元空間のそれぞれの方向を表すごくありふれた語彙です。これら3つの軸は数学的にも物理学的にもみんな同格なのに、その中で人間が生き、それぞれの方向を概念化していくと、それぞれ非常に異なった性質を帯びてきます。たとえば「鏡はどうして左右を逆転して上下を逆転しないのか」という問いは、こうした空間そのものの性質と、それを人間がどのように概念化しているかということがらの隙間に生じる問いです。ですから、物理学的・数学的には答えようがありません。と言うより、物理学的・数学的に捉えようとすると、問いそのものが蒸発して消えてしまいます。さて、そこで哲学の出番になるわけですが...、あとは当日のお楽しみ。	情報文化学部 助教授 戸田山和久
6	9月10日(火)	氷河縮小の地球に生きる	地球の温暖化によって世界各地の氷河は縮小に向かい、その傾向は加速しつつあります。陸上の氷量の減少は海面の上昇につながるグローバルな問題です。また、安定した水資源である氷河の縮小は、水資源の枯渇につながり、とくに乾燥地域に住む人々にとっては深刻な事態になりかねません。さらに氷河の縮小はその末端の氷河湖を拡大させ、洪水の危険度が高まります。雪氷圏でいま何が起きているのか、その現場をのぞいてみましょう。	環境学研究科 教授 上田 豊
7	9月12日(木)	人間(じんかん)に生きる - 心(こころ)の問題のか ずかず -	漱石ではありませんが対人関係において、知に働けば角が立ち、情に棹させば流されて、意地を通せば窮屈です。とかく人間関係はやっかいなもの。人間(じんかん)に生きていくことで生じてくる心の問題の数々、精神分裂病、うつ病、神経症など名前ぐらいいはお聞きになったことがあるものから、最近話題のPTSD、多重人格、引きこもりまで現代精神医学のトピックスをご紹介します、あわせてその対処の仕方まで論じられればと思います。	医学研究科 助教授 西岡 和郎
8	9月17日(火)	仮想空間と現実空間 - 分子の世界 -	計算機の中の女の子が微笑んだり話し掛けたりするのを見ると、私たちは、仮想空間と現実空間の間の距離が急速に縮んでいるのを感じずに入られません。生産や研究の現場でも、様々な仮想空間の技術が用いられています。原子炉や航空機の設計、気象予測、大気・海流の予測などは古くからある例ですが、最近では材料や分子の設計、生命科学の研究が計算機の中の仮想現実の世界で行なわれています。こうした研究の最前線を紹介すると同時に、それによってもたらされる問題を考えてみたいと思います。	工学研究科 教授 土井 正男
9	9月19日(木)	生物多様性と生息空間	人間の生活圏や経済活動の拡大に伴う環境汚染・破壊を背景として、地球上のあちこちで生きものたちの生息場所が脅かされています。近年、「生物多様性」が地球環境問題のキーワードの一つになり、多様性の危機や保全の重要性が叫ばれるようになってきましたが、その中身については十分に理解されているとはいえません。ここでは、生物種の絶滅過程や多様性の保全の問題を、生物の生息空間の観点から考えてみたいと思います。	生命農学研究科 助教授 肘井 直樹

回	講義月日	講義題目	講義の内容	担当講師所属部局 及び講師氏名
10	9月24日(火)	ゼノバイオティクスと遺伝子	私たちは、これまでの人類が遭遇したことのない、極めて多くの非天然化合物に囲まれて、物質文明を享受しています。これらの化合物のあるものはゼノバイオティクス(生体異物)とよばれ、ヒトや動物の体内に入り込み、その生命活動に様々な影響を及ぼします。いわゆる環境ホルモンは最も有名な例です。一方で、近年の分子生物学の進歩に伴って、生物が長い進化の過程で獲得してきたゼノバイオティクスに対する防御機構が、分子、遺伝子レベルで明らかにされてきました。本講では、幾つかの事例を引きながら、ゼノバイオティクスと遺伝子の関係を引きながら、ゼノバイオティクスと遺伝子の関係を考察してみたいと思います。	環境医学研究所 助教授 かんべ 神部 福司
11	9月26日(木)	都市・環境・法	私たち日本人の多くは、都市という人工の環境の中で生活し、あるいは働いています。その都市には大量の物資が流入し、エネルギーが消費され、大量の廃棄物と様々な環境汚染をもたらしています。都市の中にも自然の生態系や循環システムを取り入れることによって環境汚染を防止し、身近な自然環境を保全すると共に、より安全で快適な都市環境を形成していくための法制度・政策のあり方について考えたいと思います。	法学研究科 教授 かとう 加藤 ひさかず 久和
12	10月1日(火)	野生の空間を生きる人々のナビゲーション	大海原、砂漠、密林、雪原などの大自然に生きる人々は、どのようにして空間を把握し、長距離を移動するのでしょうか。どのようにして自分の位置を知り、ルートを見出すのでしょうか。様々な環境のもとに生きる人々のナビゲーション(目的地に向かう空間的移動)のワザを比較することによって、人間の空間認知の謎にせまります。	環境学研究科 教授 おかもと 岡本 こうへい 耕平
13	10月3日(木)	仮想建築空間と身体性	建築は私たちの身体のすべてを取り込んで存在するものですから、コンピュータ画面や仮想現実の再現装置を通してシミュレートすることによって、設計段階において事前検証をきわめて有効に行うことのできる分野です。そこで最も重要なことはバーチャルな空間と人間の身体性の関係です。それは建築とは何かという根本的問題にも通じており、このテーマを通して21世紀における建築創造の可能性を探りたいと思います。	環境学研究科 教授 さき き 佐々木 睦朗
14	10月8日(火)	第三世界の居住空間	居住空間は人々の生活の知恵が集約されているところであり、地域の特性があらわれます。グローバル化により、開発が進む第三世界といわれている開発途上国では人々の居住空間は急激に変わりつつあります。そこで、東南アジアの熱帯における農村を例に上げて、現在、この居住空間が地域の人々にどのような役割をなしているのか、また開発によってどのように変化しているのかを紹介いたします。	国際開発研究科 教授 にしむら 西村 よしひこ 美彦
15	10月10日(木)	空間表現と時間表現 - 文法化の視点から -	日本語には「...から...まで」、「あいだ」、「ところ」などのように、空間表現にも時間表現にも用いられるものがいくつも存在し、他の多くの言語にもこれと平行する事実が認められます。空間は視覚の対象として私たちに最も具体的な形で捉えられるものなので、その表現はより抽象的な内容の様々な表現を生み出す母体となり得るのです。空間表現が時間表現その他にどのように派生されていくのかを調べることによって、人間の認知の構造について考えてみたいと思います。	言語文化部 助教授 おくだ 奥田 ともき 智樹
16	10月15日(火)	近未来の宇宙空間に生きる	地球のスケールに比べて人間活動のスケールが同じ規模になった今日、環境問題、人口問題、イデオロギー・宗教間の衝突など、様々な問題が発生し、人類を危機にさらしています。この問題を解決し、人類が将来にわたって存続するには、宇宙に進出するしかないでしょう。宇宙で生きていくための基礎の一つとして、どのような宇宙空間の研究が行われているかを紹介し、近い将来における宇宙への進出に関して、受講者と一緒に考えていきたいと思っています。	太陽地球環境研究所 助教授 しおかわ 塩川 かずお 和夫

(注) 講師の都合により、一部日程が変更されることがあります。

2. 名古屋大学ラジオ放送公開講座

名大リレーセミナー「空間を生きる」 - 生き物と環境の語らい -

本学では、講義方式の「名古屋大学公開講座」を行っておりますが、遠距離等の制限により大学キャンパスに向くことが困難な受講希望者向けに同講座の一部をラジオ放送公開講座として開講しています。

本年度の講座は、「空間を生きる」をキーワードとし、我々人類が手にした様々な空間はどのようなものか、その空間をどのように操り、そこで人はどのように生きるべきか、問題の正確な認識と解決に向けて、様々な学問分野から最新の研究・考察の成果を解説させていただき総合的な講座です。是非、御聴講ください。なお、この講座への受講申込みの必要はありません。

東海ラジオ放送 (1332kHz) ・ 7月7日(日)~ 9月8日(日)
 ・ 毎週日曜日 午前7時30分~ 8時

放送日時	講義題目	担当講師
7月7日(日)	人間(じんかん)に生きる - 心(こころ)の問題のかずかず -	医学研究科 西岡 和郎 助教授
7月14日(日)	物語の中の時間と空間	文学研究科 高橋 亨 教授
7月21日(日)	空間表現と時間表現 - 文化化の視点から -	言語文化部 奥田 智樹 助教授
7月28日(日)	野生の空間を生きる人々のナビゲーション	環境学研究科 岡本 耕平 教授
8月4日(日)	右と左について - 空間の哲学への招待 -	情報文化学部 戸田山和久 助教授
8月11日(日)	仮想空間と現実空間 - 分子の世界 -	工学研究科 土井 正男 教授
8月18日(日)	仮想建築空間と身体性	環境学研究科 佐々木睦朗 教授
8月25日(日)	都市・環境・法	法学研究科 加藤 久和 教授
9月1日(日)	ゲーム論で環境問題を考える	経済学研究科 多和田 眞 教授
9月8日(日)	近未来の宇宙空間に生きる	太陽地球環境研究所 塩川 和夫 助教授

問い合わせ先 〒464 - 8601 名古屋市千種区不老町
 名古屋大学学務部入試課「公開講座」係
 TEL 052 - 789 - 2185・2186

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（14年5月分）

	記事	月日	新聞等名
1	豊橋技科大の統合相手 浜医大・静大工が名大	5.1(水)	読売(朝刊)
2	医療技術に特許権 医学研究科・上田実教授「再生医療の技術に特許保護を認めないと、研究開発で一番重要な部分に権利が取れない」	5.1(水)	日経(朝刊)
3	安川名誉教授がまとめ：名大の新人生意識調査14年高まった男女平等意識	5.1(水)	読売(朝刊)
4	老年学：「物忘れ」自覚は大丈夫 大学院老年科・井口昭久教授	5.1(水)	朝日(朝刊)
5	25日に博物館主催「中学生のためのネイチャーウォッチング」参加者募集	5.1(水)	読売(朝刊)
6	近況：文明の起源に迫りたい 文学研究科・伊藤伸幸助手	5.1(水)	朝日(夕刊)
7	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 5 - 知識活用こそ知恵	5.2(木)	読売(朝刊)
8	第55回中日文化賞決まる 理学研究科・三田一郎教授 医学系研究科・村松 喬教授選ばれる	5.3(金)	中日(朝刊)
9	11日に開講 名古屋哲学セミナー27年目	5.4(土)	朝日(朝刊)
10	ネパールから留学生100周年 本学で「友好の集い」	5.5(日)	読売(朝刊)
11	学生食堂もデフレ価格 名大生協ライス大は衰退	5.8(水)	読売(朝刊)
12	交遊録：山岳部の師たち 松尾 稔総長	5.8(水)	日経(朝刊)
13	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 6 - 強い頭 強い胃袋	5.9(木)	読売(朝刊)
14	文化：ES細胞樹立認可を受けて再生医療への第一歩 余剰胚の倫理が課題 豊橋市民病院不妊センター菅沼部長（名大医学部卒）	5.9(木)	中日(夕刊)
15	分子の魔術師、名大から東大に移籍 スーパーカメラで復旧に学生の力	5.12(日)	日経(朝刊)
16	看護の心でサポートを 人工透析患者のクオリティー・オブ・ライフをテーマにディスカッション 病態内科学・松尾教授ら出席	5.12(日)	読売(朝刊)
17	東海市の大橋さん（名大ヨット部OB） 収蔵6000冊「海の文庫」	5.13(月)	朝日(朝刊)
18	最先端の健康診断を 昭和区 名大病院で始まる	5.14(火)	中日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
19	15日に法学部で「日本における外国法事務弁護士の現状とその役割」講演会開催	5.14(火)	中日(朝刊)
20	きらり：名大祭プレ企画「楽しませます」	5.14(火)	中日(朝刊)
21	脚光浴びる遺伝子治療 ガン細胞自殺、免疫力高める 医学研究科・吉田教授らのグループら研究に取り組む	5.15(水)	読売(朝刊)
22	沖縄のサンゴに強力抗がん物質 抗ガン剤の170倍 生命農学研究科・小鹿教授ら発見	5.16(木)	読売(朝刊)
23	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 7 - 能力主義の徹底図れ	5.16(木)	読売(朝刊)
24	6月1、2日に「医学部研究室公開2002 - 医次元への招待」開催	5.17(金)	中日(朝刊)
25	31日から第53回日本東洋医学界学術総会開催される 総合保健体育科学センター・佐藤祐造教授らに話を聞く	5.18(土)	読売(朝刊)
26	現代文明衰退に警鐘 小川元名大教授が退官講演	5.19(日)	中日(朝刊)
27	防災科研と名大など9国立大学の地震観測グループ、気象庁の3機関で全国1100地点地震データ共有	5.19(日)	中日(朝刊)
28	工学研究科の生田幸士教授のチーム、生命活動を担うタンパク質を連続的に合成する「人工細胞」を開発した	5.20(月)	日経(朝刊)
29	安川名誉教授の名大新入生アンケート 男女意識が保守化へ帰帰	5.21(火)	中日(朝刊)
30	25日に数学継続講座「数理ウェブ」開催	5.21(火)	中日(朝刊)
31	24日に農学国際教育協力研究センターがオープンセミナー開催	5.21(火)	中日(朝刊)
32	公開講座「親子で楽しむスポーツ教室」開催	5.21(火)	中日(朝刊)
33	名大生が現地調査 姿消す 知多のため池 自然の宝庫「早く保護を」	5.21(火)	朝日(朝刊)
34	尿酸値抑制遺伝子を杏林大教授、名古屋大学予防医療部の榎本篤・大学院生が発見 英科学誌ネイチャーで発表	5.22(水)	中日(朝刊)
35	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 8 - 国籍問わず活躍の場を	5.23(木)	読売(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
36	25、26日に日進で大学構造改革をテーマにしたシンポや講演会開催	5 23(木)	中日(朝刊)
37	26日に豊島英明教授ら4人による県臨床心理検査技師会公開講座開催	5 23(木)	朝日(夕刊)
38	愛知教育大 再編・統合へ3案名大などと交渉へ	5 23(木)	読売(朝刊)
39	高校生の化学五輪 ようやく日本も参加 「参加者の中から明日の化学者が誕生することを期待する」野依良治教授	5 24(金)	朝日(朝刊)
40	サウンド技術振興財団に工学研究科・琵琶哲志助手選ばれる	5 24(金)	日刊工業
41	植物の細胞増殖で重要な働きをするたんぱく質を生命農学研究科・松林嘉克助教授、坂神洋次教授らが発見	5 24(金)	日経(朝刊)
42	学問への想い熱く 愛知学院大で開かれる日本高等教育学会のイベントとして松尾学長が講演	5 25(土)	中日(朝刊)
43	成果あげる遺伝子治療 名大病院で悪性脳腫瘍に実施	5 25(土)	読売(朝刊)
44	イネゲノム研究 戦略作りを 生命農学研究科・松尾信教授らが提言	5 27(月)	日経(朝刊)
45	第43回藤原賞に赤崎名誉教授選ばれる	5 27(月)	読売(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
46	東海地震の時期 「独自予測」公表次々 地震火山観測研究センターの山岡耕春教授らは地殻の状況が変わり時期を明示できなくなったとする立場に変わった	5 27(月)	日経(朝刊)
47	目指すは相撲の「女王」 相撲部に初の女性部員理学部3年の鶴飼恵美さん	5 27(月)	朝日(夕刊)
48	14年度言語文化部・大学院国際言語文化研究科主催公開講座の案内	5 28(火)	中日(朝刊)
49	第55回中日文化賞贈呈式が行われる。理学研究科・三田一郎教授、大学院医学系研究科・村松喬教授が受賞者として出席	5 28(火)	中日(朝刊)
50	愛知学院大で高等教育学会開催 奥野信宏学長特別補佐「大学が地域の中核に」	5 29(水)	読売(朝刊)
51	特集：医療相談 医学部・松山講師、富田教授、医学系研究科・錦見講師が読者の相談に答える	5 29(水)	読売(朝刊)
52	野依良治教授のオンリーワンに生きて - 9 - 企業研究者 もっと自由に	5 30(木)	読売(朝刊)
53	愛知県の ITS 最新事情について ディスカッション - 環境学研究科・森川高行教授ら出席する	5 30(木)	毎日(朝刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部 企画広報室 企画広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

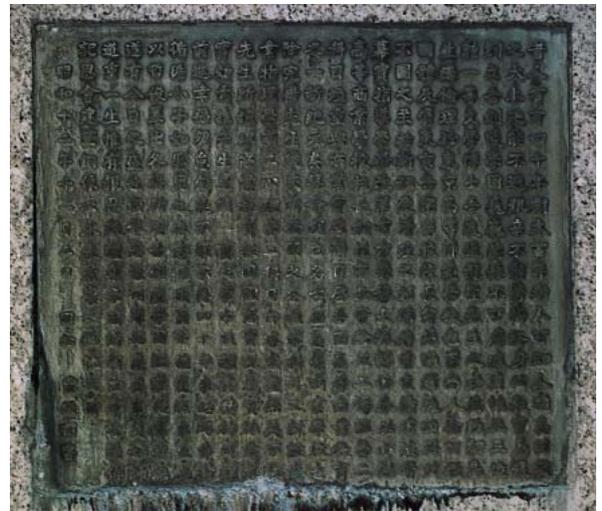
ちよっと名大史

渡邊龍聖名古屋高等商業学校 初代校長の胸像

名古屋高等商業学校（名高商）は現経済学部の前身校で、1920年に設置されました。初代校長渡邊龍聖氏は帝国大学文学部を卒業、東京音楽学校校長・小樽高等商業学校校長を歴任後、1921年11月名高商校長に着任、1935年までの15年間の長きに渡って校長を務めました。全国で六番目の高等商業学校が名古屋に創られたのは、氏の助言によるとも言い伝えられています。専門は倫理学で、著書に『乾甫式辞集』などがあります。

「学生は学生らしくあること」「学生は学生の本分をわするゝな」という二大信条、「学校は家庭の延長なり」「学校は生徒の健康保護所なり」という二大要望を氏は掲げ、名高商教育の柱としました。専攻が倫理学でもあるため、氏の教育観はこのように人格主義ではありましたが、一方で実践・実用を重んじたカリキュラム編成も行っていました。名高商の校風は氏はよって創られたといっても過言ではなく、辞任後も名高商にその影響は強く残ったようです。

胸像は1938年に完成、同年5月15日に除幕式が行われていますが、戦時中に軍事供出されてしまいました。その後名高商創立60周年を記念して1980年10月に、同窓会「キタン会」によって新しい胸像が再び建てられました。ただ裏面の銘板は戦前当時のものです。



銘板



東山地区

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、
大学史資料室（052-789-2046）へご連絡下さい。